

北朝鮮の強制収容所をなくすアクションの会「NO FENCE」会報

NO FENCE

vol. 56 2019年11月



〒102-0093 千代田区平河町 1-5-7-203

nofenceinfo@gmail.com

<http://nofence.jp/>

ヨドック収容所出獄後も闘い続けた

田月仙さんの兄けんじさんの 1985 年の手紙

小川 晴久(当会代表)

〈なぜこの手紙を取り上げるのか〉 去る 11 月 22 日都内で「田月仙『海峡のアリア』上映会と講演の集い」がありました。ソプラノ歌手田月仙のお母さん(金甲仙さん)が守る会(北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会)結成に大きな役割を果たされたという考え方で、田月仙さんにお願いし、田月仙さんの半生を描いたドキュメンタリー映画の上映会と田月仙さんの講演をお願いし、実現したものです。実は映画のほかに同名の本が 2007 年に小学館から出ています(残念ですが今は在庫切れ。図書館で借りて読んでください)。その中に 1960 年 4 月に北朝鮮に帰国し、1985 年に月仙さんが平壤を訪れた時、お兄さんから託されたお母さん宛の手紙の全文が載っています。私は 11 月 22 日の集会で前座を務め、この手紙の重要性を語りました。お兄さんは 1960 年に北朝鮮に渡った 4 人の兄の長男けんじさんで、9 年後の 1969 年 7 月 9 日に次男のひろしさんと共に政治犯とされ兄弟 4 人逮捕され、1 年の取り調べの後、1970 年 6 月から 1978 年 1 月まで約 8 年間もヨドック強制収容所に捕らわれました。次男のひろしさんはすぐに殺されてしまい、後の 3 人が 8 年の収容所体験を経験します。そのこともこの手紙に書かれています。NO FENCE は北の強制収容所をなくすことを目的とする会ですので、けんじさんの 1985 年の手紙をこの会報で紹介させていただきます。同封しましたその手紙を皆さん読んでください。

〈この手紙の注目点〉 私がこの手紙を読むのは数回目です。しかし今回の集会でこの手紙を取り上げるに当って読み返してみました。新しい発見が三つもありました。それを含め、この手紙の重要性を 7 つの注目点を指摘して明らかにしたいと思います。

第一はこの手紙の出だしにあります。「1960 年 4 月、私はあれほど恋しかった祖国に帰国して」とあります。10代の後半高校生の時の帰国です。彫刻家を志していました。その時のけんじさんの写真は 2007 年に出た本の中にはあります。とても顔立ちの良い青年です。けんじさんにとって祖国とは南北朝鮮です。恋しい祖国に帰ったと書き出しています。

第二の注目点は、11 行目に「日増しに悪化する祖国の現実」とある指摘です。1966 年の所に出てきますから、この頃からと考えていいようです。

第三点目は上記しましたが、1969 年 7 月に兄弟 4 人が逮捕され、1970 年 6 月に強制収容所に送られ、1978 年 1 月に釈放されたことです。

第四点目は、当時の金日成政権を独裁政権と言い、そのやっていることが次のように指摘されていることです。

「共通の志の一念を抱いて、自由と平和を望み、祖国の統一を願う善良なわが同胞兄弟たちを監視して、統制して、圧迫して、搾取して、投獄して、殺害して、虚偽と欺瞞と捏造と歪曲で、あらゆる手段と方法で民族の統一を防ぎ、代を継いで祖国を永久分裂する」

金日成政権がこのようなことをやっていると、帰国後 25 年過ぎた 1985 年に指摘していることです。

第五点目は、祖国の分断が世界にはない悲劇であり、苦痛であると指摘されていることです。

第六点目は、北にいる「自由と平和を望み、祖国の統一を願う善良なわが同胞兄弟たち」が、南の志と同じくする人たちとそれぞれの独裁政権を倒し、南北の統一、祖国の統一のために闘っているという指摘です。1985 年当時の韓国は全斗煥軍事政権下にありました。

第七点目は、「しかし二重三重の鉄条網で縛られ、監視され迫害されるこの国で、一体誰が先駆者になれるでしょうか」とその困難さを指摘していることです。

この第六点目、第七点目を見て、けんじさんは強制収容所を出た後、密かな方法で闘い続けていたことを示します。今回発見したことの一番大きな事実はこのことです。強制収容所を体験したものは、それを耐え抜いただけでも大変で、その後も闘い続ける、たとえ心の中だけでも、ということを私は考えてませんでした。しかしこの手紙を子細に読むと彼はそうではありませんでした。

彼はこの手紙を書いた 5 年後の 1990 年に亡くなります。40 歳にも満たない若い死でした。お母さんは次男のひろしさんの墓の隣に長男のけんじさんの墓も作りました。ドキュメンタリー映画でそれを知りました。けんじさんの墓を建てて、その後からお母さん（金甲仙さん）は公けに闘いを始めます。1993 年 8 月 22 日の中野の自分の店での証言集会です。私はこの証言集会で、北の山の中に恐ろしい強制収容所があることを初めて知り、半年後に守る会ができました。

けんじさんが捕まったのは、ミケランジェロを一番尊敬していたことを表明したことで

あつたことも、この映画は指摘しています。金日成が世界で一番偉いという唯一思想が1967年5月の朝鮮労働党第15中総で採択されます。彫刻家を目指していたけんじさんがミケランジェロを一番尊敬するのは当たり前で自然なことです。

けんじさんのこの手紙は北に渡った9万3千4百人の帰国者の良心を示すものです。けんじさんの志を継いで私たちも闇い続けましょう。この手紙を大事に保管し、時々読み返しましょう。皆さんにご紹介する所以です。

以下 年末の諸行事です。NO FENCE が 参加させていくのか二つあります。

12月7日 北朝鮮帰還事業60年 講演と鼎談会 守り会 主催

会場：専修大学神田キャンパス2号館101教室（12時～17時）

半蔵門線、都営新宿線の神保町駅徒歩4、5分。

ジャーナリスト・菊池嘉晃氏の講演会と、鼎談は、菊池氏、評論家・三浦小太郎氏、アジア自由民主連帯協議会事務局長、エッセイスト・吳文子氏（閔貴星氏のお嬢さん）のお三方です。最後に山田文明名誉会長の東京地裁裁判準備経過報告。

当日午後1時開場、1時半開演。

開会挨拶 佐伯。

講演タイトル「北朝鮮帰還事業60年 人権被害の責任と救済」

講師：ジャーナリスト・菊池嘉晃氏

（13時10分～14時10分、質疑10分、14時20分）

（休憩）約10分間

鼎談 タイトル「悲劇の拡大を防いだ閔貴星著『楽園の夢破れて』」

鼎談者：菊池嘉晃氏、評論家、アジア自由民主連帯協議会事務局長・三浦小太郎氏

エッセイスト・吳文子氏

（14時30分～16時00分、質疑10分、16時10分）

（休憩）10分間

特別報告 金正恩を被告とした第3次帰国事業訴訟経過報告

報告者 山田文明守る会名誉代表

（16時20分～16時40分、質疑10分、16時50分）

帰還事業60年、北朝鮮の人権実態に関する日韓合同セミナー

日 時：12月13日（金） 14:00～

場 所：衆議院第1議員会館 1F 多目的ホール

<プログラム概要>

14:00 開会 NGO主催者挨拶 司会者、通訳者紹介

14:05 挨拶 韓国側 キム・ソクウ（前統一次官、現21世紀国家発展研究院院長）

祝辞 黄祐呂（ファン・ウヨ）前・韓国国會議員、前 IPCNKR 共同代表

参加国議員 紹介&挨拶

15:00 報告

①朝鮮総連、帰還（北送）の過程、実態

山田文明（北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会名誉代表）

金石香（キム・ソクヒヤン 梨花女子大教授）

②北朝鮮へ帰還し、脱北後日本に定住した人の証言

木下公勝（北帰国者の生命と人権を守る会副代表）

金順姫（脱北者）

（共催）

北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会（日本）

北朝鮮難民救援基金（日本）

NO FENCE（日本）

ムルマンチヨ（韓国）

国会人権フォーラム（韓国）

16:20 討論 加藤博（北朝鮮難民救援基金理事）、韓国側 未定

IPCNKR 北朝鮮の難民と人権に関する国際議員連盟

16:40 フロアからの質疑

共同議長：洪日杓（韓国）、中川正春（日本）

16:50 会議の総括 朴宣映（パク・ソニョン 東国大学教授、憲法学者）

17:10 閉会の辞 小川晴久（NO FENCE 代表）

17:30 ムルマンチヨ（脱北者の合唱団）公演

18:00 交流・夕食会

北朝鮮の真実を語る 一九五九年 日本に届いた奇跡の手紙

「正義を教えてくれた母」（長兄・けんじ兄さんの手紙から）

愛する母へ

一九六〇年四月、私はあれほど恋しかった祖国に帰国して、愛する弟たちと再会しました。五月に咸鏡南道の高校に入学して、六三年四月に卒業後、五月に平壤の美術大学彫刻学部に入学しました。

六五年四月、弟ひろし（次男）は高校を最優等の成績で卒業しました。ひろしは大学に進学する能力は充分にありましたが、家の事情のため中学校を卒業したふみお（三男）と一緒に咸鏡南道咸興の化学工場に行くようになりました。咸興には叔父と叔母がいたので、彼らが弟たちを暖かく迎えてくれると思いました。しかし、現実は私の思いとは違いました。あのとき私は、弟たちを助けることができない自分を恨みました。当時、私は病と闘いながら勉強していましたので、私もまた厳しい状況でした。

六六年五月、私とひろしは黄海道に行つて、弟いさお（四男）を捜してきました。しかし、日増しに悪化する祖国の現実の前で、私の精神と肉体は極度に疲れました。

六七年七月、私は病気で大学を中退しました。六八年二月から彫刻作品「根拠地の春」（パルチザンと少年）を作り始めました。一方、私は平壤に弟たちを連れてこようとしましたが、それは不可能でした。それなら私が咸興に行くと提案しましたが、承認されませんでした。

六九年一月、結局私たち咸鏡南道の德城郡で一緒に暮らすようになりました。一緒に暮らせるようになつた喜びで、力を合わせて生活しました。

六九年二月から、より積極的な創作活動を開始して、二次作品「白頭山」を作りました。しかし、一九六九年七月九日、私とひろしが政治犯という名目で、われわれ四兄弟全員は突然一日のうちに逮捕されました。

私は芸術界で、ひろしは勤労大衆の中で、反政府組織に荷担しているということでした。そして私がスパイの任務をもらつてきた密偵だということなので、あまりにも意外でした。そのときになつて私は、だいぶ前から私が監視されてきたことを知るようになりました。

七〇年六月、監獄から出て、われわれ四兄弟は移住統制区域（強制収容所）で流刑生活をしました。

七〇年十月六日 愛する弟ひろしがこの世を去りました。七三年九月、私の生命が危なくなつてると、結核病院に秘密裏に入院させられました。七五年十月、鬱病生活を終えて再び移住統制区域に送られ、一九七八年一月、ようやく釈放されました。

過ぎ去つていった私の経路は、決して平坦な道ではありませんでした。しかし、異国での生活のつらさと、父母の対立によって孤独にがんじがらめになつていていた私を、祖国の同胞たちは、兄弟の心情で迎えてくれたし、北朝鮮の様々の所で愛され暮らしてきた幸せな半生でした。

でも私は、今もこの世を去つたひろしを思うと、悲しみを抑えることができません。ひろしは善良で正直な人間の典型でした。ひろしはいつも言つていました。うちのお母さんは世界に二人とない良いオモニだと。

ひろしは、最後に「お兄さん、そして弟たち、ありがとうございます」という言葉を残して逝きました。犠牲になつたひろしの復讐を果たせなければ、私には兄の資格はないと思いました。

それに私はこの目で見ました。飢えて死んだ数多い祖国の同胞、父母兄弟姉妹、若者たちを。

私の命が最も危なかつた時期、私は結核病院で働いている人たちと、そこの患者たちの真心によつて救命されました。病との戦いで苦楽と共にした患者たちは監獄で、また移住統制区域で見た安全警備隊たちと違ひはない「人間」でした。しかし彼らは善良な人間だったし、不幸な人々でした。

南北に分断されたわが祖国は、あれほどまでに願つて祈りましたが、今日の今まで祖国の統一は遺憾にも実現されません。三十八度分断線の悲劇、これほどの苦痛は世界にありません。武装でがんじがらめになつてているわが国で、いつになつたら統一がなされるのでしょうか。一つの民族であるわが祖国の南の方でも、いい人たちが多いだろうし、かわいそうな人たちも多いことでしょう。

町や村やいろんな場所で、鉄条網と絶縁台で、皆、北斗七星を眺めています。

共通の志の一念を抱いて、自由と平和を望み、祖国の統一を願う善良なわが同胞兄弟たちを監視して、統制して、圧迫して、搾取して、投獄して、殺害して、虚偽と欺瞞で捏造と歪曲で、あらゆる手段と方法で民族の統一を防ぎ、代を継いで祖国を永久分裂する、この暗黒な時期に、祖国の輝く未来のために、団結と愛で契られた、燃える同胞愛の心情で、南の

兄弟たちも胸に抱き、五千万同胞の思いを胸に抱き、共に歩む救国のこの道で、高潔な胸に一つの思いを込めて、襟を正して、心から待望する、愛する祖国、限りなく叫ぶ「三千里錦繡江山！」（朝鮮半島）。

祖国の念願を胸に抱いて、南北に輝くであろう祖国の男たち、この国の勇士たちは独裁政権を撃滅する偉大な聖戦のこの道で、勝利の日、共に叫ぶであろう「祖国統一万歳」を。

しかし、そこには帰國者たちより、祖国の人々は何十倍も多くいました。深い深い山奥にて去りましたが、実際に彼は逮捕されました。私は過去に移住統制区域で数多くの帰國者たちと一緒に過ごしました。そこにはオモニをよく知っている人もいました。

愛するオモニ、去る九月、ここ金野で一人の帰國者が平壤見学を行けるようになつたと行つて去りましたが、実際には彼は逮捕されました。私は過去に移住統制区域で数多くの帰國者たちと一緒に過ごしました。そこにはオモニをよく知っている人もいました。

しかし、そこには帰國者たちより、祖国の人々は何十倍も多くいました。深い深い山奥にて去りましたが、実際に彼は逮捕されました。私は過去に移住統制区域で数多くの帰國者たちと一緒に過ごしました。そこにはオモニをよく知っている人もいました。

愛するオモニ、去る九月、ここ金野で一人の帰國者が平壤見学を行けるようになつたと行つて去りましたが、実際に彼は逮捕されました。私は過去に移住統制区域で数多くの帰國者たちと一緒に過ごしました。そこにはオモニをよく知っている人もいました。

兄弟たちも胸に抱き、五千万同胞の思いを胸に抱き、共に歩む救国のこの道で、高潔な胸に一つの思いを込めて、襟を正して、心から待望する、愛する祖国、限りなく叫ぶ「三千里錦繡江山！」（朝鮮半島）。

私はどんな逆境の中でも、善と惡を見抜くことができる、また正義のためなら命を捧げる

こともできる、そういう意志を育ててくれた、愛する私のお母さんに、心から感謝しています。

長男 けんじ

追伸

私は、去る一九六九年七月から現在まで、そしてこれからも、彫刻をする考えはないし、力はありません。

過去の私の美術における技術と内容は、国際的な範囲から見れば、未熟なものであらう。しかし、微力ではあるが、わが祖国と人民のためになるのであればという考えで、私はすべての情熱を捧げようと思いました。

しかし、美術家だけでなく、祖国のすべての作家、芸術人たちは、人民のために服務されることもできる、ひたすら独裁政権に利用されています。

それに反対して私も、やはり祖国の数多くの人材たちと共に犠牲になりました。私は良心を守つたし、今も後悔していません。

しかし、二重三重の鉄条網で縛られ、監視され迫害されるこの国で、一体いつ誰が先駆者になれるのでしょうか。

オモニ、私がこのように考えることをお許し下さい。

けんじ

「出典 司海岸のアリア（田月仙著）小説館」

この手紙は一九六〇年四月に北朝鮮に渡った

田月仙さんの元が、一九八五年に北朝鮮を訪問した

月仙さんは渡してお母さん宛の手紙です。月仙さんが一九八五年当時日本に届き、二〇〇七年にまで北朝鮮当局の手渡しで、田月仙さんを綴った手紙が、海峽のアリアと日本に掲載され、このように全世界に公開されました。今年十二月十四日は、帰

国船第一号が新潟から出航して六十周年を迎えた

ですが、この手紙は帰國者九万三千余人の心を語ります。代表的な手紙です。皆さんよめ広げて下さい。

二十九、一、北朝鮮帰國者の答申と様子を写真会

名義代表

小川晴久